

大谷大学国史学会編

論集『日本人の生活と信仰』

佐々木 令信
根井 浄

本書は、大谷大学国史学会が、その創立五十周年の記念として、内外有縁の三十四氏による論文を収め、刊行をみたものである。

いま机上には一冊の紀要——それは学生の頃、加茂川に程近い古本屋で買い求めたものであるが——がのっている。「昭和二年——三年度 大谷大学国史研究紀要 第壹冊」と表紙に記されたこの紀要は、昭和三年六月二十五日発行で、初代主任教授橋川正先生は、その序に「大谷大学国史研究会紀要は大谷大学の国史講座に關係する教職員・卒業生及び学生が既往一学年間に於ける業績の要領を記録するために編輯したもので、ここにその第一冊の印行を企て、成るを告げた」と書きはじめている。爾来、徳重浅吉、三品彰英、五来重、柏原祐泉の諸先生が、歴代の主任教授をつとめられ、その学問的薰陶とすぐれた見識のもと国史学会の発展があったわけである。発刊の辞に示されている如く、国史学会の基本的姿勢は、仏教が人間救済の上に果そうとした役割を、日本史の上で学び、仏教を中心とする宗教の史的発展、その我国諸文化や生活における浸透、信仰形態、信仰内容などの諸課題を通して追求し、今日に至ったのである。いま本書を手にして、国史学会

のたしかな歩みと明日への創造の意欲を感じている。

こうした伝統をもつ大谷大学国史学会の五十周年にふさわしく、『日本人の生活と信仰』と題した本書は、「古代生活と仏教」「真宗教団と信仰」「民俗信仰と生活」「文化形態と宗教」の四部門から構成されている。順序として「古代生活と仏教」の所収論文から紹介していくことにしよう。

第一部 古代生活と仏教

笠原一男「日本仏教史にみる罪と罰」は、奈良時代の生活にみる罪と罰の關係は、その生活のなかで生みだした善惡の報いを、来世をまつことなしに、この世で与えられ、この世でその報いをうけることを、『日本靈異記』の説話の意識を用いて説き、平安時代の場合は、宗教的人間の生活の善惡の報いを現世ではなく、来世で受け、平安時代の仏教は寛容さをまし、宗教的善が人間の惡を超越して罪はぬぐいさられ立派に往生することを、『往生伝』の例で指摘し、罪と罰の時代による変化を考察している。日野昭「白鳳仏教における実践性」は、孝徳紀白雉四年（六五三）五月派遣の遣唐使に付随する留学僧を検討するなかで、道宣の『四分律行事鈔』をわが国に將來した道光と禪觀に入るとともに出ては天下を周遊し大乘の戒律実践をした道昭の行実に着目し、彼らの真摯な仏教の実践という行道的側面に評価を与え、その創造的精神は白鳳仏教の純真・清澄な新鮮な美の表現に相通ずる、時代の精神や感覚と無縁のものではないとする。名畑崇「草堂」について「は、寺院縁起によって伽藍成立以前の原初的な信仰形態としての「草堂」の用例に検討を加えるとともに、草堂のもつ機能と特性について考察し、質朴な草堂こそ清浄出家にふさわしい道場であり、それは草堂の修行を通して独自の思想を形成してい

った最澄が、僧撰から離れ独自に受戒する大乘戒独立の主張にながっており、草堂が天台法華宗の出発点であるとともに、その理念を支えて実践する拠点であったとする。堅田修「八角堂考」は、多角形仏堂建築としての八角堂の成立の根源とその成立を考究し、堂内荘嚴の状況を通じて、その宗教的機能は、本尊として奉安する像を同時に供養すべき人の影像と見做して追慕・礼拝する場、高僧像を安置しての修法の場、禪定（宗教的瞑想）の場、納骨の場、のいずれかであったことを、八角堂建築の具体例をあげて説き、なぜ八角形をとるかについては、わが国に八を聖数として尊ぶ觀念があったところへ、中国の八角方壇、八角三成の明堂、封禪の制、八角層塔、仏教の八角の仏具などが知られるに至って、わが民族がいだいてきた八に対する聖教觀が刺激され、聖教八を象形化して、聖教八にふさわしい聖なるもの、聖なる場所について、八を象って八角形にあらわすことになったとする。佐久間竜「愚志」雑考」は、『統日本紀』天平十六年十月二日の道慈卒伝に、唐の仏教政策に比して虚設の多い奈良仏教界のあり方に批判を加え、僧尼の事、僧尼のあり方を論じた『愚志』一巻のことがみえるが、そのなかで道慈のいう「虚設」とは何であったのかと問題を提示し、長屋王政權下の仏教政策、鑑真一行來朝後の新しい戒律受容にまつわる混乱などを通して当時の仏教界の虚設についての具体相をさぐり、本来のものとかけはなれ虚設ばかりが横行している現実に対する嘆きが、『愚志』一巻となったとする。高橋正隆「善無畏三藏影について」は、密教の祖師の付法と伝持の系譜をあらわした祖師影像について、それがどのような宗教的機能を有していたか、『五部心観』や『三國祖師影』の善無畏三藏像を通して書誌学の面からとらえ、祖師影の配列変更

の問題は、——たとえば真言密教所依の根本經典である大日經を訳した善無畏三藏・一行阿闍梨を『略付法伝』より前進した形で顕現すること——、教系の論拠とする書誌学的提示を無視しては歴史的背景はわからないとする。米沢康「穗積朝臣老の境涯」は、老の官人としての境涯——それは順調な前半生と、天皇を批判したかどで配流になった波瀾・不運の後半生であったが——をたどり、正倉院聖護藏に伝わる奈良時代の写経『維摩詰經』の奥書にみえる願文が、奈良時代の写経には珍しく国家天朝の福利を兼ねて祈らずもっぱら老の追福を願意としていることに注目し、その発願者が老の境涯の不運をみつめていたことにより願意を深くしたものであるとする。

第二部 真宗教団と信仰

宮崎円遵「初期真宗の門徒制条一班」は、門徒集團の生活規範として定められた初期真宗の門徒制条の成立から後世への影響について、年紀の明らかなものとして最も古い善円の十七箇条制条を中心として考察し、制条の成立には惣の掟の類と相通するものがあるとし、教団全体としてこれを強力に統制する者がいまだ現われなかったという真宗門徒の内部事情や、外部からの論難に対処しようとする意図があったとし、その後には伝持され本願寺に流入した制条が、蓮如の「掟の御文」や「定」の制定に影響をあたえ、実如の時代にも写伝されて本願寺門徒の間に制条についての意義をもちえていたとする。平松令三「唯授一人口訣相承について」は、高田派教団になげかけられた疑惑としての秘密相承について、その元凶である「高田正統伝」を分析し、親鸞から下野国高田専修寺で真仏へ「口授」していろいろ高田派の歴代人は親鸞の奥義を口伝として相承しており「親鸞位」に入っているとするのは、江

戸中期五天良空が高田専修寺の正当性を主張するためのものであり、史料の根拠がなく、専修寺でこのような儀式が行われた形跡は全くなく、秘密でもないものを、わざわざ秘密らしく振舞ったところに問題があったとしている。千葉乗隆「真宗における正統と異端」は、浄土真宗における正統は、親鸞の思想を正しく継承すること、すなわち、人間的行為を否定し、阿弥陀仏の救済に信順することであり、親鸞の思想からの逸脱が異端であると規定し、真宗における異端の例証として、「かくし念仏」と「かくれ念仏」から変容・異端化した宗教「カヤカベ教」をとりあげ、つねに祖师への回帰をはかることが、異端への傾斜を復元するてだてであり、真宗門徒が、ただ阿弥陀仏だけを信じ、呪術を否定することができたのは、土着化による呪術への傾斜をたえず拒否しつつ正統の保持につとめた篤信者の努力の結晶であると評価する。北西弘「光応寺蓮淳と河内門徒」は、大阪府大東市野崎専応寺蔵の蓮淳書状が蓮淳と河内門徒の関係を考える場合きわめて重要な意味をもつ史料であると新紹介して提示し、著者によって先に指摘され、その成立が考証された他の蓮淳書状七点と対比し、書状内容、筆致、花押を検討して、発給の年代が永正七年から同十四年の間であり、受給者手塚三河守は寺伝にいう専応寺第八世西ではなく、第十一世明信と推定し、巧如、存如、蓮如と仕えた有力門弟であった手塚氏と蓮淳の関係はきわめて密接であり、そこには前途有為な青年に対する蓮淳の期待や、その指導が手にとるよううかがえるとし、また『招提寺内興起後聞記并年寄分由緒実録』に注意し、顕証寺ならびに山科御坊を破却した六角方の武士片岡、河端が河内進出にあたって、蓮淳を請うて招提道場を建立したことの意味について、山科本願寺の炎上が本願寺と六角氏の対立と

いう従来の見解に検討をくわえ、本願寺教団の基礎確立に重要な役割を演じた蓮淳の挙動を中心とした人間関係——六角氏、本福寺、下間氏、証如など——を時代の推移のなかで諸史料を用いて実証し、本願寺と六角氏の和睦は、証如の後見役蓮淳の差配によるもので、蓮淳と六角氏の利害合一による協力であり、河内の招提寺建立も充分ありえたとし、地方教団の内情を大局的に把握することによって真宗教団史上におけるその意味を明らかにしている。細川行信「親鸞における『選択集』の付属」は、師源空より直接『選択集』を付属された門弟について、源空門下の系譜資料中もともと古い『私聚百因縁集』が、幸西、聖光、隆寛、証空、長西の五人をあげ、親鸞については「其外有一人」とのみ記しているのは、著者往信が、『選択集』を付属された親鸞の名を知りつつも、愚禿と称し念仏聖の範疇にはいらなかったために源空の上足より省いたものであるとし、二種の廻向にもとづく浄土真宗を開顕されたところに、源空の念仏義を継承する親鸞の立場があり、そしてそこに『教行信証』選述の意義が求められ、同時にそれは、『選択集』の付属を受けた師源空よりの恩恵に応えた、弟子親鸞の使命でもあったとする。藤島達朗「寛正法難後の蓮如上人の動向について」は、北陸下向までの蓮如の動向について、その間に書いた二回に及ぶ讓状を中心に考察し、この時期に、蓮如と山門との間に和解の工作が進みつつあり、蓮如にとってそれは山門が本願寺の破却のみならず、地方の門徒の生活まで破壊することを坐視し得なかつたからであり、山門の目的は本願寺の末寺たることの確認であるが、その根底に頑然として存したのは、外的にも活躍していた順如を否定し、時に十一歳未得度で青蓮院にて侍童の生活をしていた実如にてそれを認め、蓮如排斥を志向すること

であったとし、蓮如の北陸下向は、山門の注視を意識した慎重な行動であり北陸が父祖三代(綽如、巧如、存如)による伝統の教団であり、蓮如自身、その責任において安固するのが目的で、「本願寺御影堂御留守職」(讓狀標卷)の自覚にたつ蓮如による最初の真宗寺院・吉崎坊舎のもつ真宗史上の意義は大きく、それは法式勅行の改変にもみられるとする。佐々木求巳「蓮如伝の二三の問題」は、まず蓮如の得度とその戒師について、青蓮院で得度したのは、単なる因襲ではなく、北陸の庄園経済に注目し、一宗独立の形をとらず天台下における一勢力として徐々に歩を伸し、後日の大を期すことにあり、戒師は門主尊応ではなく、門主代理としての明仁二品法親王であったとし、つぎに順如の退職と実如の襲職について、叡山との関係でとらえ、本願寺に対し硬化しつつあった諸団体の意志を和げんとしたものと、北国巡化の理由について、その基盤を考究し、歴代宗主と北国、興福寺大乘院経覚との血縁、青蓮院が藤島庄の本所であったこと、朝倉氏との関係などが、蓮如の北陸行、特に吉崎の地の決定の諸因であったとする。柏原祐泉「近世真宗教団成立の実態」は、近世初期の東本願寺における教団成立、固定化の実態を把握した論考で、『申物帳』と『集会所日記』をもとに、末寺・道場に対する木仏本尊許可、在家・檀家に対する木仏下付、教団発展と密接に関連する講の結成状況を詳細に分析し、十七世紀後半期は、真宗教団がもっとも近世的な形をとって固定化する時期であったと結論づけ、この時期について、一般末寺は小農民を基盤とする寺檀制発展に促がされて寺院化を促進し、在家では木仏下付が有力農民、有力町人の檀家を中心に一般化して激増し、寺檀制の定着・安定化したことを推測させ、貞享四年頃から在家木仏は激減し統制され權威化を強

めて、檀家制が都市や農村での階層構造をそのまま吸収することと照応し、より一層教団体制の保全に役だてられたとし、こうした推移と併行して本末制、寺檀制の確立に先行してその制約をうけずに結成された在家を主な対象とする講が、元禄以後は、縦の系列のなかで構築される度合いを強め、直接法主の御書を下付することで講を通して法主教権による集権的支配構造を固めていったとする。大場厚順「笠原本誓寺について」は、信越地方の真宗寺院における大坊の形成と東本願寺教団の形成を現在上越市にある本誓寺を中心にみ、信濃国勝願寺下を離れる経過、最も広範囲に講を取次ぎ本誓寺の教線拡大に大きな役割を果たした本覚坊、越後の領国支配をおこなった上杉景勝や、本願寺教如と本誓寺との結びつきなどにつき、具体相を追うことによって明らかにしている。吉田清「真宗寺院の原初形態」は、特に仏教民俗を通じて考察したもので、真宗教団の成立の背後には真宗以前の雑多な仏教民俗をその基層にした常民としての地方門徒集団が存在したのであり、真宗寺院の原初形態は俗道場の管理者である俗聖によって経営されていたもので、真宗にはほとんど民俗性が存在しないようにいわれてきたが、報恩講や御巡廻は祖霊巡行と物忌の真宗化であり、万部経、千部経のような祖霊供養が昇華されなまま残っていることにみられるように、民俗的儀礼や習俗が門徒の精神生活の基底に生き続けている事実を忘れてはならないとする。

以上、本書の第一部、第二部の各論文紹介につとめてきた。きわめて粗雑にして著者の真意を筆者の非力からつたえ得たかどうか心もとないかぎりであり、充実した力作を前にして、いまは異論を立てる余裕も紙幅もない。第一部「古代生活と仏教」には、各論文の中心テーマが、仏教説話、往生伝、仏堂、寺院縁起、圖像、

写経などにもおよんでおり、より広い視野から古代仏教の受容と展開をかんがえることにより、もって古代生活と仏教との交渉が明らかにされている。第二部「真宗教団と信仰」は、人間救済をなってきた真宗教団の形成と展開を中心に、追求された重厚な論文が多く、地方教団の基礎的研究や、その動向について大局的な歴史の把握による真宗教団史上における意味や、地域史の視点、民俗の問題がとり上げられているなど、今後の可能性を示唆しているといえよう。

本書のあとがきにいう。「本論集を世に問うのは、一つにはわれわれ自らの五十年のあかしであり、一つにはわれわれ自らへの鞭撻のしるしであり、以て本学会の明日への決断を明らかにするためである。」と。更なる結実を期待し、大谷大学国史学会の創立五十周年にあたって、学界に共有の財産を得たことを喜びとしたい。

(佐々木令信)

第三部 民俗信仰と生活

大谷大学国史学会五十年にわたる学問の星霜は、本書の発刊の辞、あとがきに述べられているが、ここ二十年の歩みで特筆されることは、仏教民俗学という新しい学問分野を樹立され、我が国の歴史学界に新たな局面を開拓された五来重博士の功績である。文献の世界と民俗の世界を結ぶ懸橋は、博士によって安定されたと言つてよい。その学風を精密かつ重厚に継承された研究者が輩出したことも当学会の自負されるところでもあろう。本書第三部に「民俗信仰と生活」という章題を掲げ、十篇の論文が収録され、本書がより浩瀚なものになっているのは、以上の理由によると思われる。さてその内容であるが、限られた紙幅の中で十分に各論を紹介し、検討を加えることは容易ではない。ましてや、評者は

同じ地平で論評する資格を欠いているかも知れないが、原稿を求められたおり卒直な感想を述べてみたいと思う。

五来重博士「幡蓋から灌頂幡および白蓋へ―修験道伝承の古代性―」は、日本の文化、日本人の精神構造を究明するものとして近來注目されている修験道研究の一端である。博士によれば、欽明十三年紀の仏教伝来記事にみえる幡蓋は、のち灌頂幡と呼ばれ、かつ法隆寺金銅灌頂幡は、この書紀にみえる幡蓋に最も近い構造を持つものとして、その複雑な構造を分析された。しかも、こうした幡蓋、灌頂幡が、三河花祭の白蓋や、羽黒修験の及位に残存することを、豊かな民俗資料と芸能史、修験道儀礼の見識を持つて指摘されている。博士の史観は、古代から現代までの歴史事象は「そのまま完結終了することはなく、何等かの意味で残存し、その痕跡を残す」というもので、本論はそれが見事に開眼したものであろう。こうした一貫した博士の論述は、文献史学の限界を警鐘したものであり、民俗学に基礎をおく自信に裏付けられた鋭い舌鋒は、従来の歴史学への批判でもあろうと思われる。

高取正男氏「後戸の護法神」は、元來、寺社の後戸は神聖視された場所ではなく、人々が住居に関して抱いてきた伝統的な信仰即ち、住居の奥部に家と住人を守護する霊能が存在するという信仰が、寺社の建築に投影されたものという。文献実証学と民俗学の素養が結実した論証である。伊藤曙寛氏「庶民仏教研究の一面」は、富山県下の民俗芸能と祭礼行事を分析し、庶民仏教の滲漫と変遷を探ろうとされる試論である。その調査された民俗行事に、共通する内容は、火を焚く風習、錫杖、スリ鉦の使用であり、これらは修験道がもたらした民俗や、時宗遊行聖の関与があると推定される。綿密な調査を通しての着想は、誠に興味深い、実

証には今一步の迫力がなく、今後の課題としてその解明を期待したい。沼賢亮氏「富士山信仰について―富士人穴草子を中心にして―」は、『ふしの人穴』『ふじの人あなそうし』の「人穴に地獄あり」「富士山上略縁起」の「山中に遺骨あり」の記事を重視して、富士山の原初の信仰が死霊のあつまる他界信仰であつたと説かれてゐる。山岳信仰の起因を他界信仰とするのは、近來の修驗道研究が得た一つの學說であり、本論はそれを深めようといふたが、やや資料不足の感を拭えない。しかし、「人穴草子」に説かれる和田平太胤成の洞窟探險譚が『吾妻鏡』に出現し、實際の話であつたことは、今後の「草子」類研究の指標となるであろう。嶋口儀秋氏「寺社縁起と民俗―善光寺縁起を中心に―」は、寺社の勸進活動に有効な手段として使用された唱導説話類を物語縁起と規定し、特に「善光寺縁起」に注目された。その内容を分析すると、海中出現仏、巡り仏の伝承、人神信仰、生身弥陀の信仰など、そこには我が国固有の民俗信仰、神觀念の表出があり、それを基盤として成立しているという。民俗事例と文献を駆使して、縁起の内容分析に成功され、筆者の仏教民俗学が身に付いた佳作である。しかし、従來の研究成果の依存度が高く、筆者自身の着想と新見解がないのは寂しい気がする。

ところで、従來の日本仏教史研究で欠如してゐたのは、庶民の仏教史研究であろう。近來民俗学を歴史学に導入することによつて、研究論文も活発に発表されているが、こうした庶民の仏教、信仰を担つた中心的指導者として、教団や教理の枠からはみ出た聖（ひじり）、山伏などの実態が注目されている。庶民仏教史研究は、こうした宗教者の宗教的活動と庶民生活との触れ合いの中で捉えようとするのであろうが、この問題に迫るものとして、佐

々木孝正氏「木食山居とその周辺―信州小川村高山寺の勸進史料をめぐって―」がある。従來、木食僧として異色異端の彫刻を残して芸術活動にも奔走した円空、木喰行道、白道が知られていたが、筆者によつて山居もその一人であることが確認された。また山居が浄土宗捨世派の彈誓の系譜を引くこと、および、彼の勸進活動が近世社会における民衆の経済力を結集して可能であつたことなど、多角的な鋭い視点がみられる。現在あらゆる面で新資料の蒐集と多角的分析の獲得が求められるが、本論は厳密な実地調査と厳格な実証に基づく仕事の蓄積によつて立論された力作である。こうした木食僧の研究として、はからずも藤田定興氏「会津の木食僧・行齋、榮昶の宗教活動」が得られた。筆者によつて新出の木食僧の存在と、その宗教活動が知られるようになったことは慶ばしい。今後は近世仏教の側面を構成する彼らの総括的な把握が望まれる。ただ惜しまれるのは、筆者の一語一句にも慎重な論証の中に誤字が見い出されることである。次に聖（ひじり）の問題を追求したものに、豊島修氏「西国巡礼の一資料―熊野那智山の三十三所巡礼行者を中心に―」がある。筆者は青願渡寺文書「本願中出入証跡之写」を提示し、三十三国巡礼聖の実態、内部構造、修行形態について考察された。問題の資料は、従來の巡礼研究の空白を埋める貴重なものであるが、欠字や判読に難点を残すものがあり、今後は古文書学の成果を導入して完璧なものとされるよう期待したい。それはともかく、三十三国巡礼の祖型が那智山に存在した巡礼行者にみられること、しかも、その形態が時宗の遊行形態に求められることを示唆された点は筆者の功績である。ただ気になるのは、何々、何々という表現が散見され、史用語としてその概念が伝わらないものがあつた。例えば、中、

世、的、山、伏、中、世、的、靈、場、な、ど、で、あ、る、が、読、者、初、学、者、に、対、し、て、筆、者、の、意、図、す、る、概、念、の、説、明、が、少、し、欲、し、か、つ、た、よ、う、な、気、が、す、る。

鈴木昭英氏「越後八海山行者の憑祈禱」引座「について」は、宗教学、宗教社会学にも寄与する論考である。この八海山行者の祈禱の特色は、人間の死霊や生霊、動物霊を中座に憑依させて語り出させる呪法で、他に実例をみない独自の託宣儀礼であるという。修験道や日本のシャーマニズム研究としても貴重な報告である。こうした厳密な調査を通して成った論考に、木場明志氏「民間陰陽師の呪法—高知県香美郡物部村「太夫」における事例研究—」がある。これは、副題のとおり高知県香美郡物部村における祈禱呪術宗教者の実例研究で、彼らが保持する呪法が、陰陽師、巫女、山伏の呪法を含有しているとして、その混在、融合性を指摘されている。民間陰陽師の具体的研究として注目される。しかし、この呪法の混在、融合性が中世以降の民間陰陽道の実態としてその歴史性を最後に付言されたのは、本論ではやや実証不足を否定できない。

以上で、第三章の概要紹介を終えるが、これだけ生活に根ざした問題を追求した論考が揃ったのは感容でもある。しかも、本章の執筆陣の大半は、何等かの形で五来博士の学恩を受けられた方々と見受けられ、一つの学問的集団としてその研究成果を一堂に披露されたものとしても注目される。今後は、こうした学問的集団の中で相互の検討と批判が公然と行なわれ、この分野における研究がさらに発展することを願いたい。

第四部 文化形態と宗教

第四部「文化形態と宗教」には、多岐にわたる問題について七篇の論考が収録されている。当学会が関係する研究がそれだけに

広域で、その使命を果たそうとされる姿勢が如実に表われている。残念ながら評者は、各論を検討する素養と見識を持ち合わせておらず、ただ紹介に終始せざるをえないことをお詫びしておきたい。

その第四部の巻頭を飾る土居次義氏「狩野一溪とその遺作」は、京都清凉寺蔵の屏風画が狩野一溪の作品であることを指摘されている。一溪は、『丹青若木集』の著者として知られていたが、画家としての業績は全く不明であった。しかし、この度筆者によって彼の作品が発見、証明されたことは、美術史学界の収穫でもある。角田文衛氏「頼朝と義経」は、頼朝と義経の確執に至る動向を『吾妻鏡』によって丹念に検討され、頼朝の朝廷を利用した義経・奥州藤原氏への圧迫は、結局は義経に対する恐怖で、それが頼朝自身の宿意であったという。その恐怖とは、義経の軍事的才能であって、筆者が最も力説された卓見である。しかし、最も注目されるのは、十二世紀の大動乱を通して頼朝を棟梁とした鎌倉政権の樹立が、東国平氏による第三次独立戦争であったという指摘である。西洋史の学識にも明るい筆者ならではの見解で、今後史学界の反響を呼ぶことは必至であろう。

森龍吉氏「無我愛運動とその背景・周辺」は、明治末期から昭和三十年代まで続けられた青年僧・伊藤証信を中心とした宗教文化運動、即ち無我愛運動を思想的観点から論評したものである。伊藤は、この運動を真宗信仰から出発させ次第にシンクレティズムに傾倒したが、その状況を雑誌「無我の愛」を通して考察された。無我愛運動を本格的に追求した先駆的役割を果たす論文である。また、筆者によってこの運動に関する資料が『真宗史料集成』第十三巻に収録されたことを付しておきたい。残念なのは、筆者が急逝されこの論考が遺作となったことである。松野純孝氏「如

来教について」は、名古屋市中御本元をおく如来教の成立の事情・教義を根本經典である「お経様」の一語一句を通して検討されている。如来教の基盤が病氣治しの宗教にあり、新宗教の原質・原型が存在するという見解は、日本の新宗教全体を把握する一助となることを示唆されている。山本唯一氏「近世庶民の生活と信仰―芭蕉七部集の世界―」は、『芭蕉七部集』の句作を分析して近世庶民の諸相を探ろうとされたものであるが、『七部集』俳文学世界の様相が主題となっている。筆者は、芭蕉研究の権威者であって、そのまろやかな論考にひかれるものがあった。また、芭蕉の宗教的題材を詠むときは「おとなしく仕立てよ」という教えは、評者の俳句に関する私的関心もあって興味深い。

大桑斉氏「幕藩制仏教の形成―鈴木正三とその周辺―」は、手堅い論考である。本論は、形骸化していた仏教の復興、復古運動が、元和・寛永初期に宗派を超えた僧侶群によって展開されたという旧稿に続き、その後の運動の展開と変質を論じた上で主題の問題に迫られている。ことに鈴木正三に注目し、彼が幕藩制王国に接近して、その下で近世仏教を国家機構に位置づけようとする動向を史料に即して検討され、やがてこのような仏教側自体の仏教形成運動の中から、幕藩制仏教が誕生したことを指摘されている。その評価は同じ研究領域者の中で当然なものであるが、幕藩制王権という表現は他論文からの引用ながらも筆者の幕藩制国家と全く異とされないのか、その見解を少しでも明示されて欲しかった。しかし、本論は「近世仏教が幕藩制国家そのものの表象としての仏教」であるという自論を一步深められた緊張感あふれる力作である。日野西真定氏「高野山の神仏分離」は、筆者によって初めて紹介された高野山所蔵の分離史料に支えられた長篇の

論考である。全体として、金剛峯寺の『日並記』や『回章』などの史料を逐一検討して高野山における神仏分離の実状を概観したものであり、少し問題点を絞られた方がより説得性があったかもしれない。しかし、高野山の神仏分離の状況が判明したのは、何よりも史料の蒐集に努力された筆者の意欲的な研究姿勢の賜ものとして見做うものがある。

以上で与えられた各論の紹介を終えるが、多岐にわたる問題と門外漢でもあり、筆者の真意を誤解して、誤った紹介や妄評を加えている点もあると思われる。それは評者の非才と学問のさびしさを暴露したものととして嘲笑され、御寛恕の程をお願いしたい。今、三、四部を通して抱く感想は、本書が『日本人の生活と信仰』となつていくように、常に当学会が「仏教が人間救済の上に果たそうとした役割」（発刊の辞）を主要な課題とされ、それを日本史上で具体化されたことである。そのことはまた、我が国における歴史学会の中でも貴重かつ特異な学会として賞讃されることを物語っている。しかし、最後に付言しておきたいことは、本書全体を通して誤字が目立つことである。個々の指摘は省略するが、本書の編集体制、校正の段階に如何なる支障があったにせよ明らかに誤植ではないと思われるものがあつた。出家した著名な某女流作家が自己の作品に、往生決定を往生結定と書いて誤りをおかした当世であるが、研究者・求道者として、論考にあたっては万全の配慮と慎重を期したいものである。摺筆にあたり、当学会の創立五十周年をお祝いするとともに、論文集という煩雑な編集に携われた方々の労をねぎらい、本書が古典となるよう念じたい。

(根井 浄)

(菊判・八五六頁・昭和五十四年十二月・同朋舎刊・一五〇〇〇円)